

中国のほんの話(71)

## 虹影『裏切りの夏』

～ 天安門事件の渦中にいた女流作家が描く半自伝的小説 ～

蔭山達弥

「川面に映った少女の姿が揺れる。継ぎの当たった服。肩にかかった二本のおさげ。そして、栄養不足で黄ばんだ髪。同級生は誰も、彼女に話しかけようとはしない。授業の前と後、みんな彼女をいじめる。学校に行くのが、今ではすっかり怖くなった。父は港湾労働者で、背中を痛めてからもう何年も家にいた。母がときどき洗い物や掃除で得るわずかな金で、一家は生活していた。母は遠くまで仕事に出かけ、何週間も戻ってこないこともあった。やがて母が病に倒れ、生活はますます悲惨になった。一家にのこされたのは、父のわずかな傷病手当だけ。ふたり食べられるか食べられないかの顔で、五人生活していかなくてはならなかった。」(虹影著、浅見淳子訳『裏切りの夏』青山出版社1997)

虹影は1962年9月21日、重慶市の貧しい家に生まれた。彼女の家は長江の南岸にあった。父は半盲の船頭、母は工場労働者で、10平方メートルの家に一家五人で暮らしていた。「私は自ら人に誕生日を言ったことはない。身内に対しても、一番仲が良い友達に対してさえも。初めはわざと忘れ、それから本当に忘れてしまった。18歳までは私の誕生日を覚えている人はいなかった。18歳以降は人に言いたくなかった。」18歳の時、虹影は自分が私生児であることを知った。この境遇が彼女をかき乱し、彼女の創作の源にもなった。創作を通して、絶えず出かけては戻り、それによって自分を探し求めた。

虹影は兄弟の順は六番目で、私生児であったが故に何度も白い目で見られた。「私が6歳の時、黄色い肌の痩せた顔、髪の毛は薄くてお下げが結えない。頭の回転が鈍くて、道でゴミを集めているおじいさんでも不思議に思った。ついには、母も失望してしまった。私を嫌っていることがありありだったので、私を母方のおじに送った。」絶望している時、母が迎えに来て、重慶市に戻って学校に通った。大学入試に落ちてから、ある軽工業専門学校に合格し、専攻は会計助手だった。二年後、卒業し仕事を探した。彼女はできるだけ他の土地に行き、出張した。休暇願を出し、それから家に帰って休むと言って、いっそのこと病欠を届け出、本当は単身でこの広大で果てしない土地をほつつき歩いた。彼女は詩を書き始め、漫遊を始めた。北は朝鮮との国境近く、南はベトナムとの国境近くまで。一途に詩を書き、小説を書き、原稿料を稼いで、



生活を維持した。

1989年初め、何年も家を離れていた虹影が実家に戻ると、父逝去の知らせを聞いた。同年2月、虹影は本格的に詩を勉強するため、北京の魯迅文学院にいた。そして自由を夢見て天安門に通い、学生デモに参加、1989年6月4日日曜日の天安門事件を体験する。

小説『裏切りの夏』(原題『背叛の夏』)の主人公林影(リンイン)は作者の等身大だ。「林影が走る。天安門をあとにして。血に染まった広場は、どんどん遠ざかっていく。燃えさかる街の中を、林影は逃げ惑う。銃の放つ灰色の煙が、霧のように林影を包みこみ、肌をちくちくと刺す。顔がひきつる。手がなすすべもなく震える。ときおり胃が痙攣し、壊れた時計の振り子のように体がよろめく。立ち止まってしまう。横になりたい。胃の中のをすべて吐き出してしまいたい。けれども足が、止まろうとしない。むしろ、駆り立てられたように走りつづける。遠くへ。さらに遠くへ。」(浅見淳子訳) 実体験をした作者にしか書けない描写だ。

本書は、作者がのちに夫となるイギリス帰りの趙毅衡と知り合い、1991年イギリスへの留学ビザを手に入れ、ロンドンに渡ってから書き上げ、翌1992年“老虹”という偽名で、台湾で出版された。(その時の原題『裸舞代』台湾文化新知出版社) 中国本土では当然発禁となった。天安門事件から八年後、あの事件を風化させてはならないという思いが、作者を突き動かし、本書の西側での出版を決意させた。1997年夏、本書は日本を含め11ヶ国で一斉刊行となった。イギリスの国籍を取得した彼女は、2000年9月21日、一人で北京に戻り、虹影は北京に居を定め、夫と離婚、『飢餓の娘』(関根謙訳、集英社2004)や『K』、『上海王』、『上海之死』、『上海魔術師』の上海三部作等、旺盛な執筆活動を続けている。

かげやま たつや (非常勤講師・中国文学)